

## 「年の末に思ふ」

県立神戸高等学校長  
新谷 浩一

### ○ 1年はあっという間ですね

12月となり朝夕はめっきり寒くなりました。放課後、華道部が飾りに来てくれた生け花は見た目がそのままクリスマスツリーを思わせます。よくよく見ると杉がスプレーで白く飾られているのです。お洒落ですね。メッセージが添えられています。

『花材はさつま杉、白米杉、カーネーションです。本日はテーマがクリスマスということで一足先にサンタクロースが来てくれたかのように華やかに生けました』

早や今年が終わろうとしているのですね。年を重ねる度に1日1日の長さは変わらないものの、1年1年は短くなっていくような気がします。かなり痛感しています。



思えば2024年は4月から久々に学校での勤務となり、しかも校長職ということで戸惑いばかりの春でした。5月には父を、10月には母を亡くし、長年にわたった遠距離介護こそ終わりを迎ましたが、その後の手続等もあり夏秋冬と何度も埼玉、東京へと出向きました。そんな事情を抱えながらも加古川東高校での1年を無事に終えられたのは、街と人々のあたたかさがあったからです。今の私はあの街、あの学校に集う生徒、先生方、保護者や同窓会の方々に支えられ、育ててもらった私なのです。

ちなみに、今年の修学旅行で加古川東と本校は1日違いで同じ石垣島を巡ることとなりました。偶然にも本校の先生方に出会った加古川東の生徒の1人が「私のことをまだ覚えているか、校長先生に聞いておいてください」と言付けたそうです。その答えをしつきますね。残念ながら去年のことは忘れられないし、特にあなたくらい頻繁に校長室を訪れた生徒は他にいないので、忘れたりなんかしてあげないです。

さて、今年3月の私は「さあ、これから恩返しだ」と心に決めていました。しかし、2025年4月からはここ神戸高校で働くこととなりました。そのため恥ずかしい話ですが、3月は校内で何度も涙を流しました。断ちがたい思いがあり、離がたい人々がいたのです。それでも私たちは教育公務員です。感傷はポケットにしまい込み、命じられたところで働くのが常です。これまで、そうやって働いてきましたしね。

そもそも神戸高校は私にとって畏れ多い学校です。歴史も伝統も先輩の校長先生方の顔ぶれも、そのすべてが。そんな私の気持ちを和らげてくれたのは先ずもって神戸高校の先生方のあたたかさでした。僅かばかりおられた旧知の先生方をはじめ、皆さんが私を受け入れようとしてくださいました。感謝でした。

また4月の初っ端の合唱部ホームコンサートも私を勇気づけてくれました。折々の思いを洗いざらい歌えば、誰かと思いを分かち合うことができるという『きみ歌えよ』の歌詞が胸に響いたのです。「神戸高校の校長だから何処か構えないといけないかな」、そう気負う自分もその頃には存在しました。でも、あの日の歌声に「自分は自分だから、ありのままにいくしかないな」そう思えたのです。吹っ切れた瞬間ですね。

かくして2025年は別れの冬に始まり、出会いの春へ。毎年、創立記念式典をする学校など聞いたことがありません。生徒全員で『サリマライズ』を合唱する学校など聞いたことがありません。全国大会出場等を決めた生徒を同窓会長が自ら激励してくれる学校など聞いたことがありません。そんな『神戸高校の常識』に戸惑ってばかりいた日々ですが、気づけば年末。明後日にはいよいよ2学期終業式を迎えます。

誰ひとり生命を落とすことなく迎えられそうなこと、生徒の皆さんとご家族、先生方、同窓会の方々など、本校にかかわるすべての方々に今はまだ感謝です。有り難うございます。あわせて本校にかかわりを持たなくとも拙文におつきあいしてくださっている方々にもこの場を借りて感謝します。それでは皆様、Merry Christmas & よいお年を。

